

モニターになって30年

原 満子

全家研 ポピー中国支部 教育モニター
(広島県 福山市)

ポピーとの出会い

「あなたには、三人分の失敗談があるでしょう。それを話してもらおうといいですよ。」

これが、モニターとしてスタートするきっかけの言葉でした。

当時、私は小6、小1、1歳の娘を育てていました。子育てに不安がいっぱいでしたので、教育講演会にはできる限り出かけて行きました。また、会員になってからの私は、これ幸いとばかり、毎月の小集会にも参加させてもらいました。

二女が1年生になったばかりの4月、交通事故に会い、60日間の入院生活をしなければならなくなりました。二女は退院後、登校を始めたのですが、学校へ行くのを毎日嫌がって、泣きじゃくってばかりいました。

私にとって二女の登校は、待ちに待ったものでしたが、二女には不安がいっぱいだったのでしょう。登校班で学校へ行けるようになるまでには、2ヶ月もかかりました。この頃私は、この子に何をしてやれば良いのだろうと思い悩んでいました。ちょうどその時に声をかけてもらったのが、ポピーとの出会いでした。

二女は1学期中のほとんどを休んだため、学校生活には慣れていないし、基礎学力もついていないのでした。

そこで、「学校の授業が良く分かるように」と、その日から親子二人三脚での勉強の日々が始まりました。入院中の50日間、本をたくさん読みました。この事が、彼女を随分助けてくれました。

しかし、算数はずっと苦手でした。「宿題が分からない」という度に、ポピーに助けられました。ですから、私はとてもポピーの内容に詳しくなり、モニターとしての自信がつかしました。

その後、長女はクラスメートから仲間はずれにされたり、三女は小4でのクラスが学級崩壊になったりと、母としてたくさんの体験をしました。その間、私にはいつでも相談に乗ってくださる対話主事の先生や、担任の先生がいてくださいました。

私は困ったときには、「まわりの方に相談して」きました。今私は、若いお母さん方に孫の相談をしています。

家庭環境の変化

私は、三人の娘達の歳が離れているので、小学校へ16年間通いました。その間、お母さん方にも様々な変化がありました。長女が小さい頃は、パンやクッキーを一緒に作るのが大流行していました。子育てに手をかけるのが、あたりまえの時でした。学級懇談会にもほとんどの方が出席していました。

下の娘の頃になると、参観はするけれど、懇談は面倒なので、残らない親が増えていました。話の内容も、家で子どもにしつける事を学校で決めてほしい等の意見が出てくることもありました。お母さん方が働きに出て、子ども達は低学年のうちから塾へ行く、という流れもでき始めていましたし、お母さん方

は、毎日忙しいので、自分たちの手で子ども達の生活習慣のリズムを作ってあげよう、という気持ちの余裕もなくなっていました。当然、ポピーの会員づくりも難しくなっていました。本当にこれで良いのだろうか、と思ったものです。

私が育った頃は、自給自足があたり前でした。子育てをしていた昭和40年代は、電化生活が始まり、電源のスイッチを入れると、家事が済みます。現在では調べ物も、ネットで検索するとすぐに分かる時代です。

だから、親子でものを一緒に作ったり、考えたりすることが減ってしまったのではないのでしょうか。同時にコミュニケーションの場も減り、育てる場も少なくなったと思います。例えば、お彼岸の「おはぎ作り」。もち米を炊き、餡を入れ、きな粉をまぶす。親子で、孫とお婆ちゃんなどで作ったおはぎは、格別です。お仏壇に供え、皆でいただく。

自然に、ご先祖様への尊敬の気持ちや家族のために働く気持ちも育ちます。このように、自然体で伝わるコミュニケーションもできます。

以前、外山先生から「家風」という話をお聞きしたことがあります。あたり前にできる事、受け継ぐべき家庭でのしつけもたくさんあります。

同居のすすめ

結婚したら別世帯があたり前のようになっています。子どもが生まれたら、同居だと助かるのにも思います。親も子も、大家族の煩わしさから逃げているのだと思います。私たち年長者には、生きてきた分の知恵も工夫する力も備わっています。嫌われたらと思わ

ないで、上手に口出ししていきましょう。伝えたい事、大事なしつけ等、遠慮しないで口に出していきましょう。

今一番不足しているのは、コミュニケーション能力だと思います。まず、家庭の中で、この力を養ってほしいと思います。

終わりに

全家研の家庭教育五訓「親はまず暮らしを誠実に」この言葉に出会い、私の一番信じる道となりました。行動は勿論ですが、自分の気持ちに、子どもの思いに、家族の思いにも誠実でありたいと思います。

子育てに今も昔もありません。あなたの師は、あなたの周りにおられます。父、母、家族、ご近所、会社にも、そして我が子も含め、大勢おられます。お手本がたくさんあります。

この事を伝えるために、これからも「おせっかいおばさん」を続けて行こうと思います。将来を託す子供たちが大きな夢に向かい、努力し続ける世の中になる事を願っています。